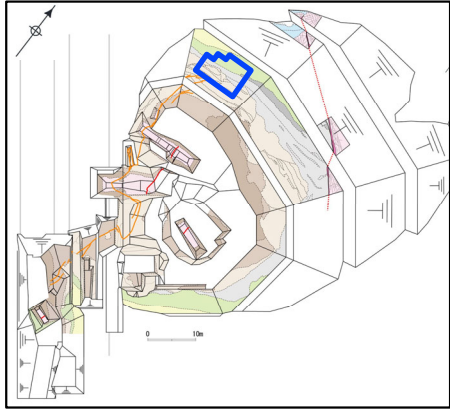
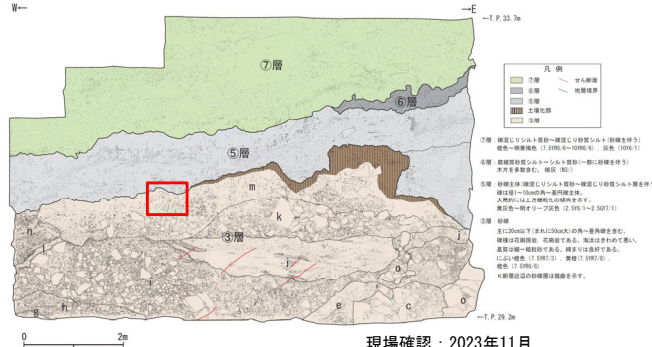


D-1トレンチ北西法面 m層中の割れ目の観察状況(写真5)

- 割れ目はシルト質砂礫層中に分布している。上位の礫混じりシルト質砂には連続せず、層相境界(⑤層上部と③層との地層境界)に変位は認められない。
- 割れ目の走向傾斜はN-S走向高角度西傾斜である。

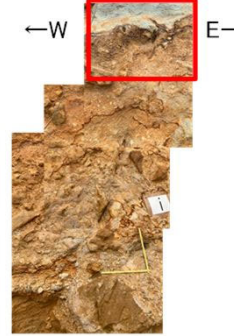


調査位置図



詳細位置図

現場確認：2023年11月
 清掃により法面が後退したため、現地確認時(2023年12月)のスケッチを掲載。



凡例

— : 割れ目

- - - : 層相境界(黄色)

- ①: 割れ目: N3° E65° W
- ②: 割れ目: N19° E70° W

←W

E→



写真5

20cm

撮影：2024年2月

←W

E→

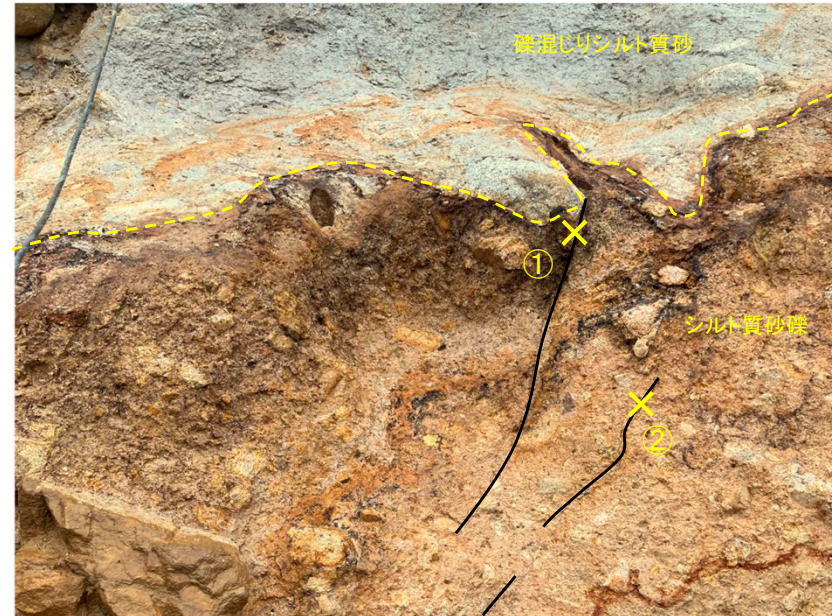


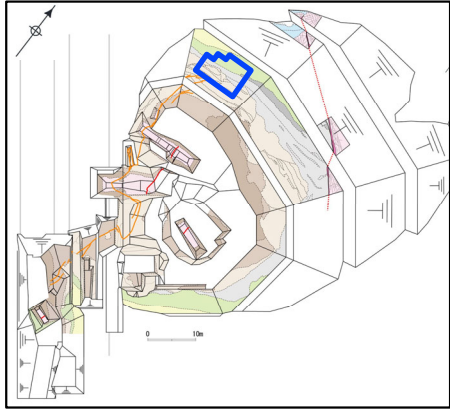
写真5

20cm

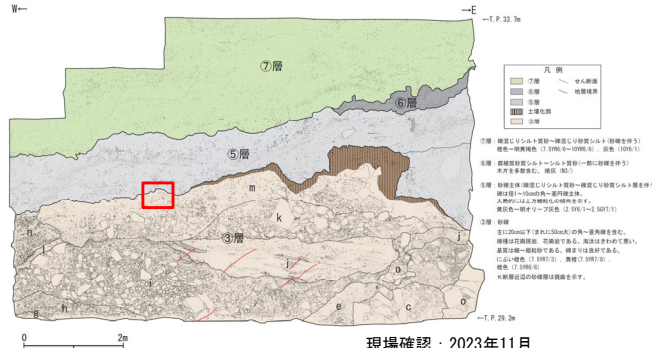
撮影：2024年2月

D-1トレンチ北西法面 m層中の割れ目の観察状況(写真6)

- 割れ目はシルト質砂礫層中に分布している。⑤層の礫混じりシルト質砂には連続せず、層相境界(⑤層上部と③層との地層境界)に変位は認められない。
- 割れ目の走向傾斜はN-S走向高角度西傾斜である。



調査位置図



詳細位置図

現場確認：2023年11月
 清掃により法面が後退したため、現地確認時(2023年12月)のスケッチを掲載。



凡例

／ : 割れ目

--- : 層相境界(黄色)

①: 割れ目: N3° E65° W

←W

E→

←W

E→



写真6

20cm

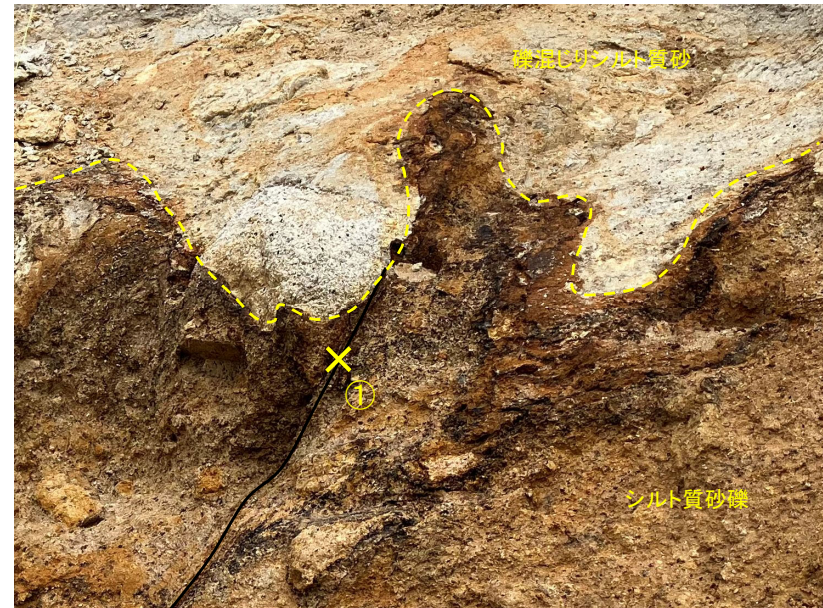


写真6

20cm

撮影：2024年2月

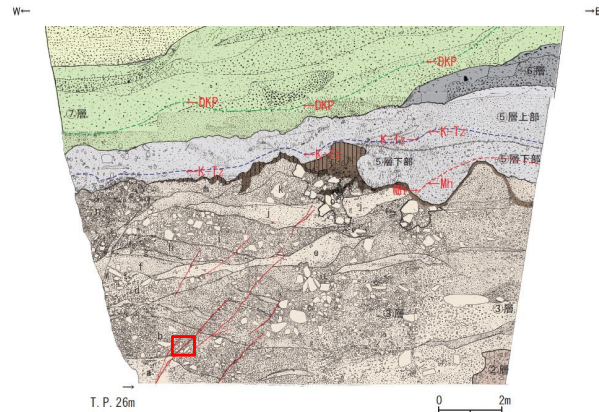
撮影：2024年2月

D-1トレンチ北西法面 北西法面砂礫層中のK断層の観察状況

- 砂礫層中のK断層付近には礫が断層と平行に近い姿勢で配列している状況、断層による引きずり構造が見られる。また挟在する砂層に逆断層センスの変位が見られる。



調査位置図



詳細位置図

現場確認：2023年11月
 清掃により法面が後退したため、現地確認時（2023年12月）のスケッチを掲載。

凡例

- : 割れ目
- - - : K断層 (破線は不明瞭)
- - - : 層相境界 (黄色)
- : 礫 (黄色)
- : 断層による引きずり構造 (黄色)

←W

E→

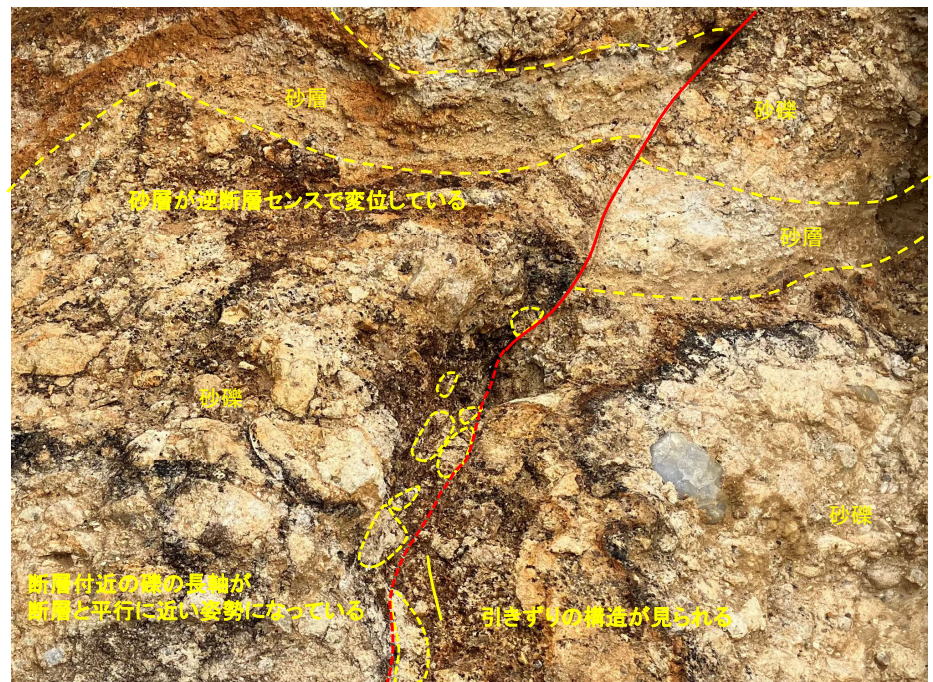
←W

E→



撮影：2024年3月

10cm



撮影：2024年3月

10cm

余白

コメント回答(現地調査-9)

余白

【コメントNo.現地調査-9】

D-1トレンチ北西法面の⑦層中の複数の割れ目について、追加の観察を行うこと。

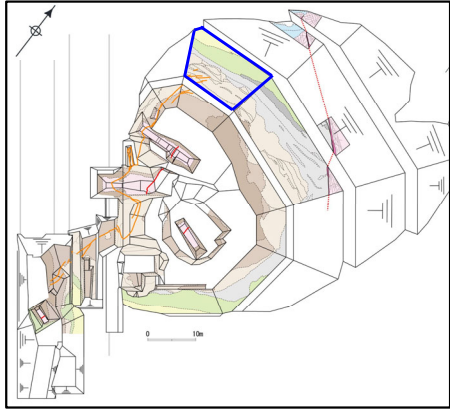


【回答要旨】

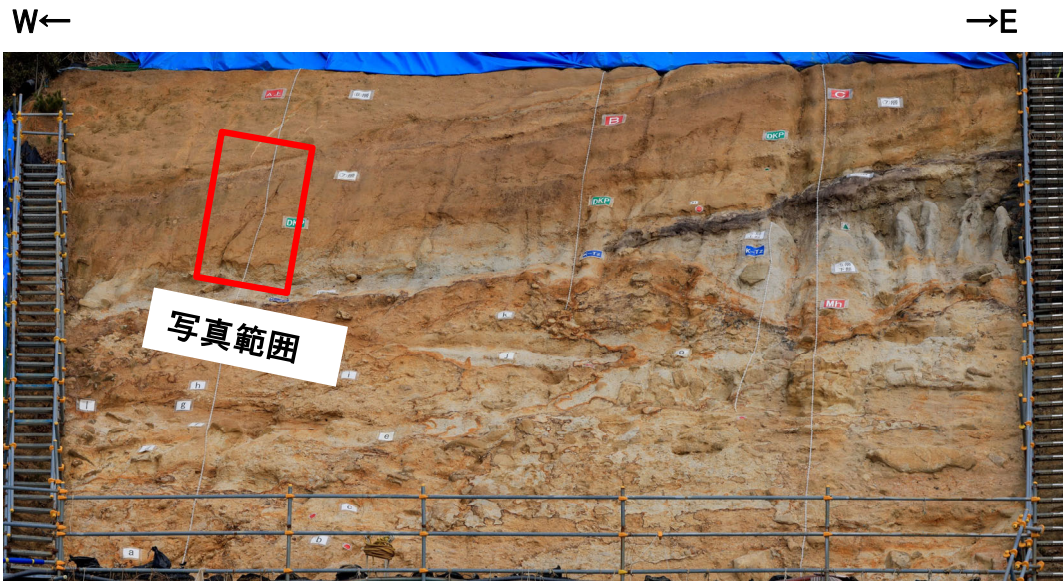
- ⑦層中の割れ目について露頭の詳細観察を行った結果、以下の観察結果から断層ではなく割れ目であると判断した。
 - ⑦層中の割れ目をまたいで礫を多く含む層が連続して分布している。(写真1参照)
 - ⑦層中の割れ目をまたいで⑦層の砂層・シルト層が連続して分布している。(写真2参照)

D-1トレンチ北西法面の⑦層中の割れ目について

- D-1トレンチ北西法面の⑦層中に見られる割れ目について、追加の観察を行った。



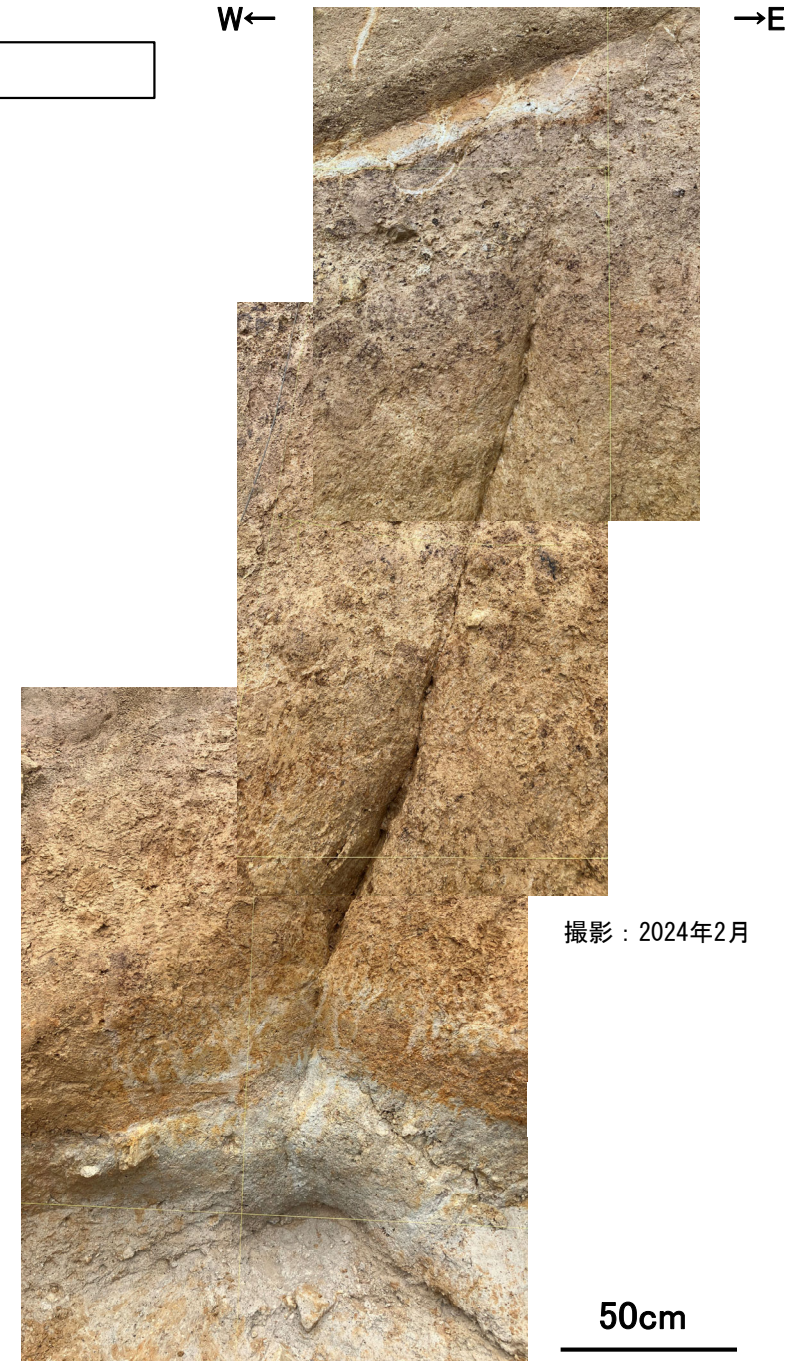
調査位置図



撮影：2024年1月

D-1トレンチ北西法面全景写真

2m



撮影：2024年2月

50cm

⑦層中の割れ目の分布状況(左写真赤枠)

D-1トレンチ北西法面の⑦層中の割れ目について

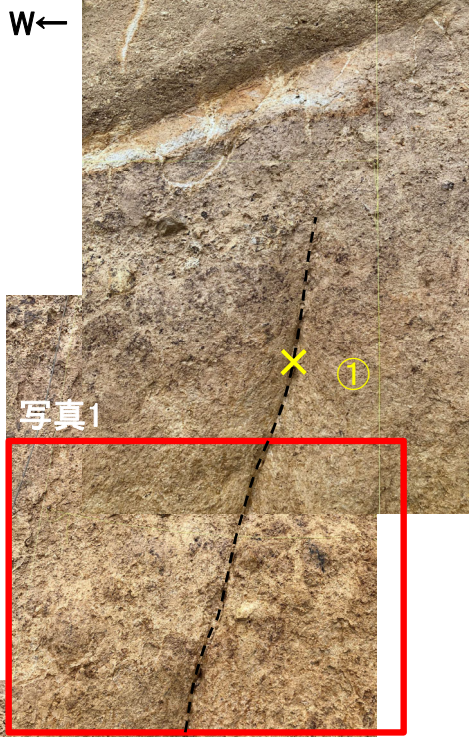
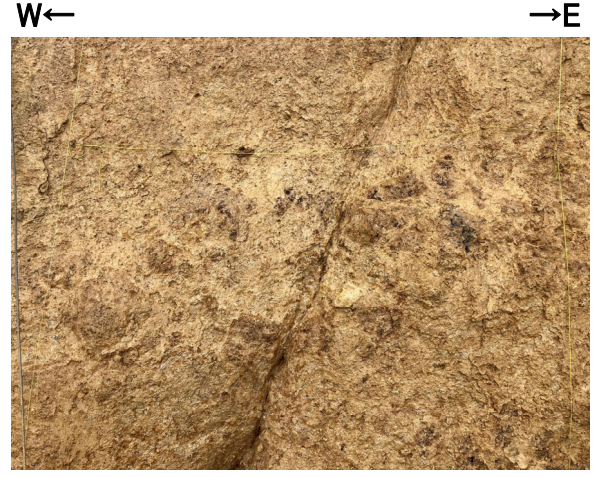


写真1

撮影：2024年2月

- E
- ⑦層中の割れ目をまたいで礫を多く含む層が連続して分布している。(写真1参照)
 - ⑦層中の割れ目をまたいで⑦層の砂層・シルト層が連続して分布している。(写真2参照)
 - 割れ目付近は浸食により法面の奥側に凹んだ形状をしている。



撮影：2024年2月

写真1

20cm



撮影：2024年2月

写真1

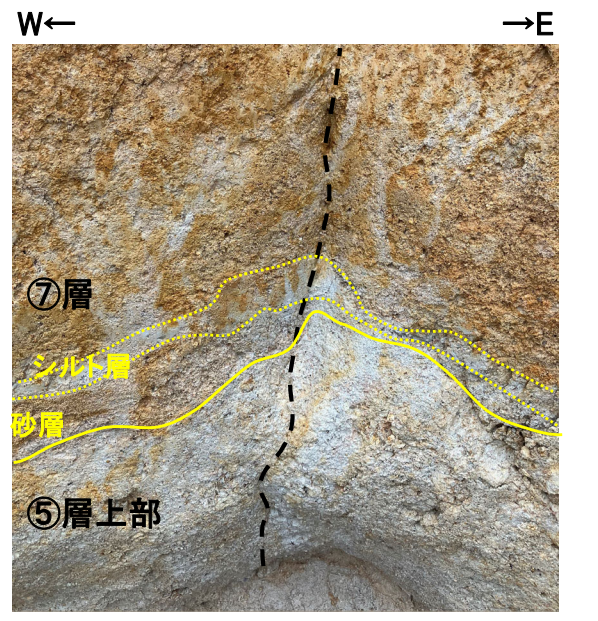
20cm



撮影：2024年2月

写真2

20cm



撮影：2024年2月

写真2

20cm

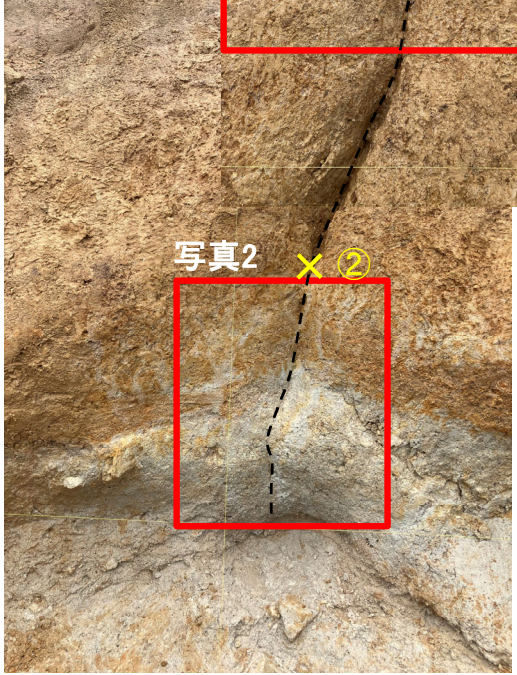


写真2

- ①: 割れ目: N21° E80° W
- ②: 割れ目: N43° E86° W

- - - : 割れ目
- : 不整合境界
- ⋯ : 層相境界
- : 礫

50cm

割れ目の分布状況

余白

3. K断層の連続性評価に関するコメント回答

余白

コメント回答(現地調査-25)

余白

【コメントNo.現地調査-25】

(H24-D1-1孔)

柱状図の記事欄(3-6頁参照)にK断層と記載の箇所(58.96~59.30m)について、K断層と評価しない理由を説明すること。



【回答要旨】

- H24-D1-1孔 深度58.96~59.30mの破砕部について走向・傾斜の類似性に加え、最新活動で形成された破砕部の性状(断層ガウジ又は断層角礫の有無、明瞭なせん断構造・変形構造の有無、条線方向及び最新活動ゾーンの変位センス)の類似性等の複数の観点からふげん道路ピットのK断層の性状との対比を行った。その結果、深度58.96~59.30mの破砕部については、N-S走向、西傾斜、ガウジを伴う正断層センスであり、最新活動で形成された破砕部の性状が類似していないことからK断層ではない(連続しない)と判断した。(3-7頁赤枠部分参照)
- さらに、K断層とH24-D1-1孔深度58.96~59.30mの破砕部について最新活動時期を比較した結果、K断層は①層以上の地層に変位・変形を与え、MIS6以前の地層である③層の上部の地層に変位・変形を与えていない一方、H24-D1-1孔深度58.96~59.30mの破砕部は鉬物脈法に基づき、少なくとも後期更新世以前に生じた最新の熱水活動時期以降は活動していないと判断されることから、K断層とは最新活動時期が大きく異なっていることを確認した。(敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造 K断層と原子炉建屋直下を通過する破砕帯との連続性 3.2.2 鉬物脈法に基づく検討 3-47頁以降参照)

H24-D1-1孔 深度58.96~59.30mの破碎部をK断層と評価しない理由について

H24-D1-1孔ボーリング柱状図

H24-D1-1 (12 / 21)

標高 (m)	深度 (m)	柱状区分	岩種	色調	硬軟	割れ目の状態	風化	記号	コア採取率 (%) 最大コア長 (cm) R Q D	岩級区分	標準貫入 (N値~深度) 試験		室内試験	掘進速度 (cm/時)	孔径 (mm) / 孔壁保護	給排 (mm)	送水圧 (MPa)	送水量 (L/分)	排水量 (L/分)
											(N)	(m)							
56																			
57																			
58																			
59																			

● 深度58.96~59.30mの破碎部について、H24-D1-1孔のボーリング柱状図には、ボーリングコアの肉眼観察のみによる観察結果として「破碎部(K断層)」と記載されている(記載している断層名の妥当性については連続性評価時に確認している)。

●58.96~59.30m : 破碎部 (K断層)
 58.96~59.05m : 粘土混じり岩片状部 (Hj)
 上端50° で不明瞭、下端45° で直線的にシャープに連続。幅1mmの軟質白色粘土脈を伴う全体が粘土化して軟質化している。明褐灰色を呈する。幅63mm (45°) 。

H24-D1-1孔 深度58.96～59.30mの破砕部をK断層と評価しない理由について

- H24-D1-1孔 深度58.96～59.30mの破砕部について走向・傾斜の類似性に加え、最新活動で形成された破砕部の性状(断層ガウジ又は断層角礫の有無、明瞭なせん断構造・変形構造の有無、条線方向及び最新活動ゾーンの変位センス)の類似性等の複数の観点からふげん道路ピットのK断層の性状との対比を行った。その結果、深度58.96～59.30mの破砕部については、N-S走向、西傾斜、ガウジを伴う正断層センスであり、最新活動で形成された破砕部の性状が類似していないことからK断層ではない(連続しない)と判断した。(赤枠参照)
- さらに、K断層とH24-D1-1孔深度58.96～59.30mの破砕部について最新活動時期を比較した結果、K断層は①層以上の地層に変位・変形を与え、MIS6以前の地層である③層の上部の地層に変位・変形を与えていない一方、H24-D1-1孔深度58.96～59.30mの破砕部は鉱物脈法に基づき、少なくとも後期更新世以前に生じた最新の熱水活動時期以降は活動していないと判断されることから、K断層とは最新活動時期が大きく異なっていることを確認した。(敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造 K断層と原子炉建屋直下を通過する破砕帯との連続性 3.2.2 鉱物脈法に基づく検討 3-47頁以降参照)

連続性評価結果

起点	対比するボーリング孔	連続性 検討範囲	断面図上の 番号	破砕帯範囲		走向	比較対象との 走向の差の 絶対値 (°)	傾斜	比較対象との 傾斜の差の 絶対値 (°)	最新活動で形成された破砕部の性状			最新活動以前に 形成された 破砕部の性状等 注) 1	連続性 検討結果	破砕帯名	
				上端深度	下端深度					断層ガウジ・ 断層角礫 の有無	明瞭な せん断構造・ 変形構造 の有無	条線				変位センス N: 正断層 RL: 右横ずれ R: 逆断層 LL: 左横ずれ
				(m)	(m)											
ふげん道路ピット		-		EL+14.8m		N5W		67W		注) 2	注) 2	注) 2	R		K断層	
-	H24-D1-1	範囲内	①-1	45.91	45.94	N12W	7	79W	12	無	-	37L	N,LL	×	f-d1-1-1-1	
			①-2	46.30	46.45	N57E	62	33NW	34	無	-	81R	N	×		
			①-3	47.64	47.75	N1E	6	58W	9	無	-	30R	N,LL	×		
			②	49.20	49.91	N9W	4	74E	39	有	無	90	N	×		
			③	53.77	54.54	N22E	27	75E	38	有	無	75R	N	×		
			④*	58.96	59.30	N8E	13	78W	11	有	有	-	N	×		
			⑤**	60.12	60.15	N9E	14	88W	21	有	有	80L	N	×	D-1	

注) 1 最新活動以前に形成された破砕部の性状等について起点破砕部と対象破砕部の性状が類似しているかを確認する。
 注) 2 ふげん道路ピットにおいて、断層ガウジ・断層角礫の有無、明瞭なせん断構造・変形構造の有無及び条線は取得できていないため、
 基盤岩中でのK断層の性状である以下を用いる。
 断層ガウジ・断層角礫の有無: 有 明瞭なせん断構造・変形構造の有無: 有 条線: 高角度条線(67.5L～67.5R)
 —: データを取得していない箇所

- : 起点の破砕部の走向・傾斜から±20°程度の範囲内のもの
- : 起点の破砕部の走向・傾斜から±20°程度の範囲内に分布し、かつ、両者の走向・傾斜の差が±20°程度以内のもの
- : 起点の破砕部の走向・傾斜から±20°程度の範囲内に分布し、かつ、両者の走向・傾斜の差が±20°程度以内の可能性のあるもの
- : 起点の破砕部の走向・傾斜から±20°程度の範囲内に分布し、かつ、両者の走向・傾斜の差が±20°程度以内で、かつ、最新活動で形成された破砕部の性状のうち断層ガウジ・断層角礫の有無及びせん断構造・変形構造の有無が一致するもの
- : 起点の破砕部の走向・傾斜から±20°程度の範囲内に分布し、かつ、両者の走向・傾斜の差が±20°程度以内で、かつ、最新活動で形成された破砕部の性状のうち断層ガウジ・断層角礫の有無及びせん断構造・変形構造の有無が類似するもの
- : 起点の破砕部の走向・傾斜から±20°程度の範囲内に分布し、かつ、両者の走向・傾斜の差が±20°程度以内で、かつ、最新活動で形成された破砕部の性状(断層ガウジ・断層角礫の有無、せん断構造・変形構造の有無、条線方向もしくは変位センス)が類似するもの
- : 起点の破砕部の走向・傾斜から±20°程度の範囲内に分布し、かつ、両者の走向・傾斜の差が±20°程度以内で、かつ、最新活動で形成された破砕部の性状のうち断層ガウジ・断層角礫の有無、せん断構造・変形構造の有無が類似し、条線方向もしくは変位センスが類似する可能性があるもの
- : 起点の破砕部の走向・傾斜から±20°程度の範囲内に分布し、かつ、両者の走向・傾斜の差が±20°程度以内で、かつ、最新活動で形成された破砕部の性状(断層ガウジ・断層角礫の有無、せん断構造・変形構造の有無、条線方向もしくは変位センス)が類似し、かつ、最新活動で形成された破砕部の性状等が類似するもの

* 深度58.96～59.30mの破砕部について、H24-D1-1孔のボーリング柱状図には、ボーリングコアの肉眼観察のみによる観察結果として「破砕部(K断層)」と記載されている。
 一方、当該破砕部はN-S走向、西傾斜、ガウジを伴う正断層センスであり、最新活動で形成された破砕部の性状が類似していないことからK断層ではない(連続しない)と判断した。

** 深度60.12～60.15mの破砕部について、H24-D1-1孔のボーリング柱状図には、ボーリングコアの肉眼観察のみによる観察結果として「破砕部(G断層)」と記載されている。
 一方、当該破砕部はN-S走向、西傾斜、ガウジを伴う正断層センスであり、最新活動で形成された破砕部の性状や最新活動以前に形成された破砕部の性状等が類似していることからD-1破砕帯であると判断した。

余白

4. その他のコメント回答

余白

コメント回答(現地調査-28)

余白

【コメントNo.現地調査-28】

(H24-D1-1孔)

G断層の箇所(60.12m)の研磨片において、白い脈が見えるためXRD等の鉱物脈に関するデータを拡充すること。



【回答要旨】

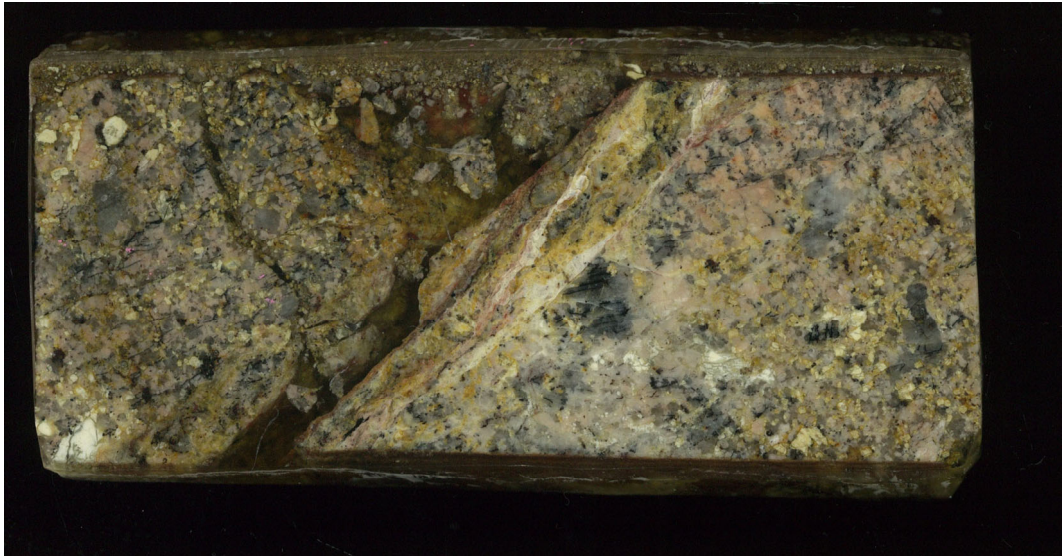
- H24-D1-1孔 深度60.15mに認められる白い脈についてXRD分析を行っている。
- その結果、ご指摘のあった白い脈にはスメクタイト、カオリナイト、石英、斜長石、カリ長石が含まれる。石英、斜長石、カリ長石は新鮮岩にも含まれることから、白い脈はスメクタイト及びカオリナイトで特徴づけられる。

H24-D1-1孔 深度60.15mに認められる白い脈について

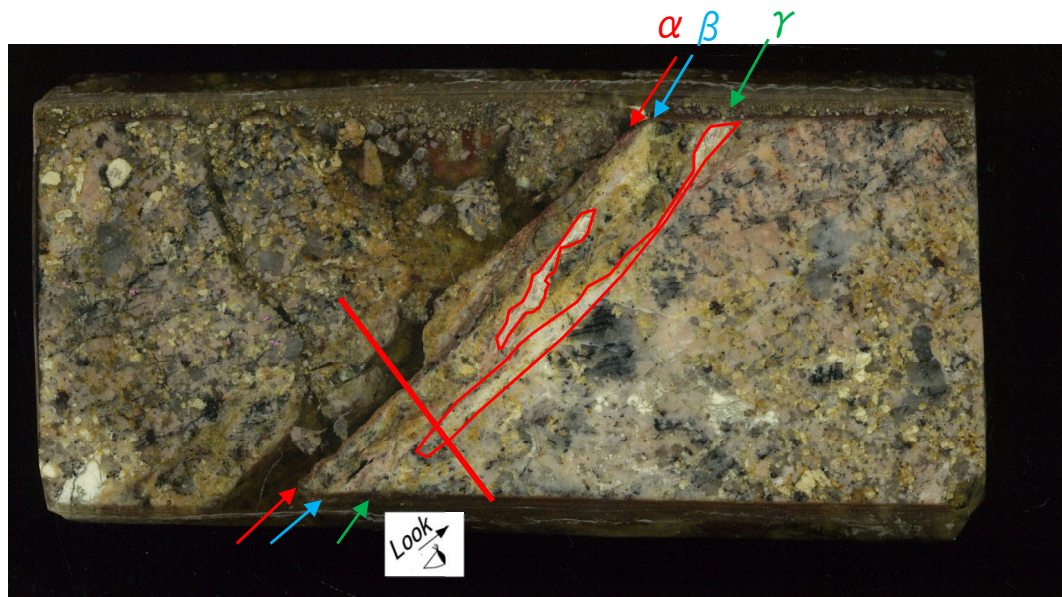
- 白い脈は、D-1破碎帯の深度60.15mの断層面 γ 沿い及び断層面 β 沿いの一部に認められる。
- この白い脈を対象にXRD分析を実施している。(次頁参照)

研磨片写真

孔口側



孔口側

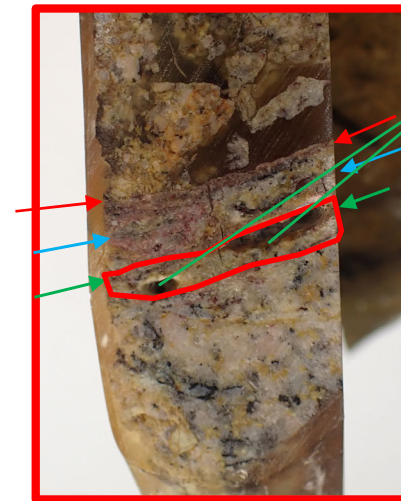


5 cm

※赤線は白い脈の分布範囲を示す。

孔底側

XRD試料採取位置

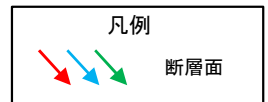


凹んだ箇所です試料を採取した

1 cm

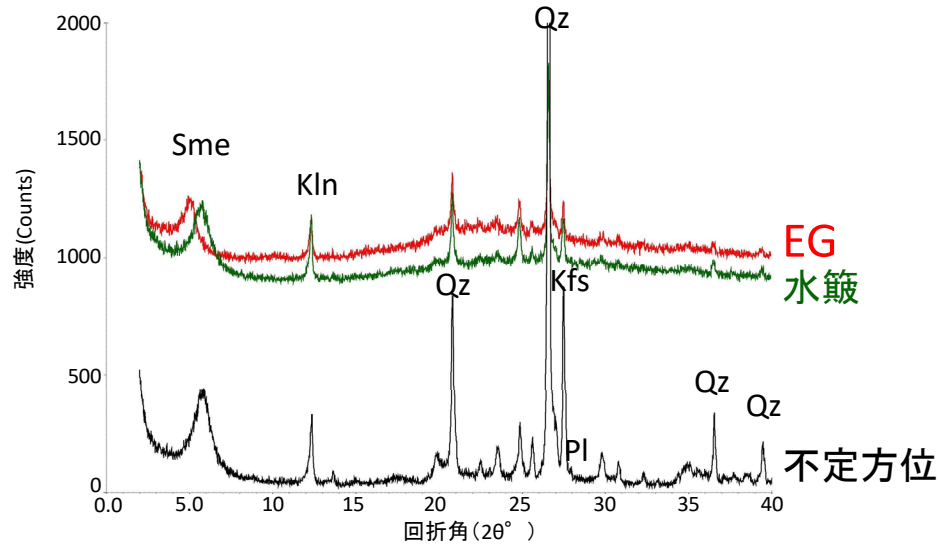
孔底側

※赤線は白い脈の分布範囲を示す。



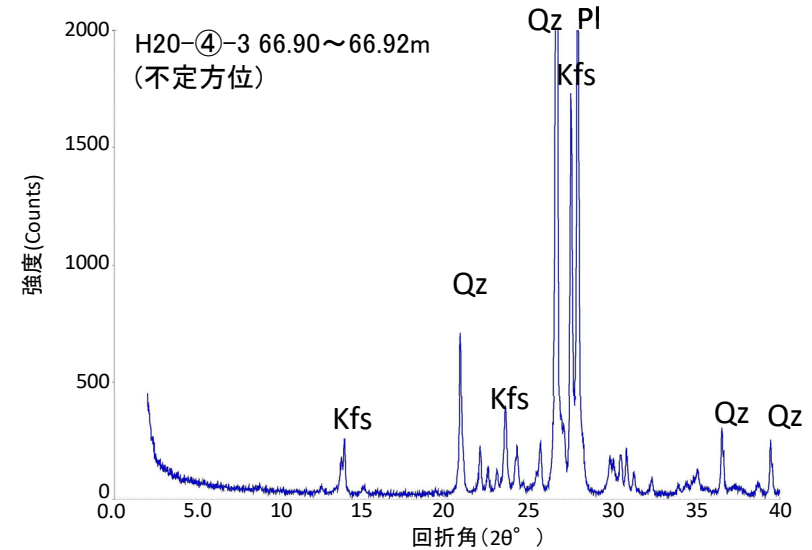
H24-D1-1孔 深度60.15mに認められる白い脈について

- H24-D1-1孔 深度60.15mから採取した破碎部と新鮮な花崗岩の鉱物組成を比較した。
- D-1破碎部(H24-D1-1_60.15m)は新鮮花崗岩に比べ斜長石やカリ長石の割合が小さくなっている。一方、スメクタイトとカオリナイトが認められる。
- XRD分析結果から、研磨片における白い脈はスメクタイト及びカオリナイトで特徴づけられる。



H24-D1-1孔 60.15m(D-1破碎帯)のチャート

水簸及びEG処理を施した試料の回折パターンは見やすくするため不定方位の回折パターンの上方にずらして表示した。



新鮮な花崗斑岩のチャート

X線粉末回折結果(基本は不定方位分析の回折強度を使用)

試料採取位置		スメクタイト	雲母粘土鉱物	カオリナイト	緑泥石	石英	斜長石	カリ長石
花崗斑岩 新鮮部	H20-④-3 66.90~66.92m		((・))	((・))	◎	◎	◎	
破碎部 断層ガウジ	H24-D1-1 60.15m	△		△		◎	(・) ○	

記号凡例
 Sme: スメクタイト
 Kln: カオリナイト
 Qz: 石英
 Pl: 斜長石
 Kfs: カリ長石

凡例 ◎:多量 ○:中量 △:少量 ・:微量 (・):極微量 ((・)):極微量で、定方位測定時のみピークを確認

余白

コメント回答(現地調査-26)

余白

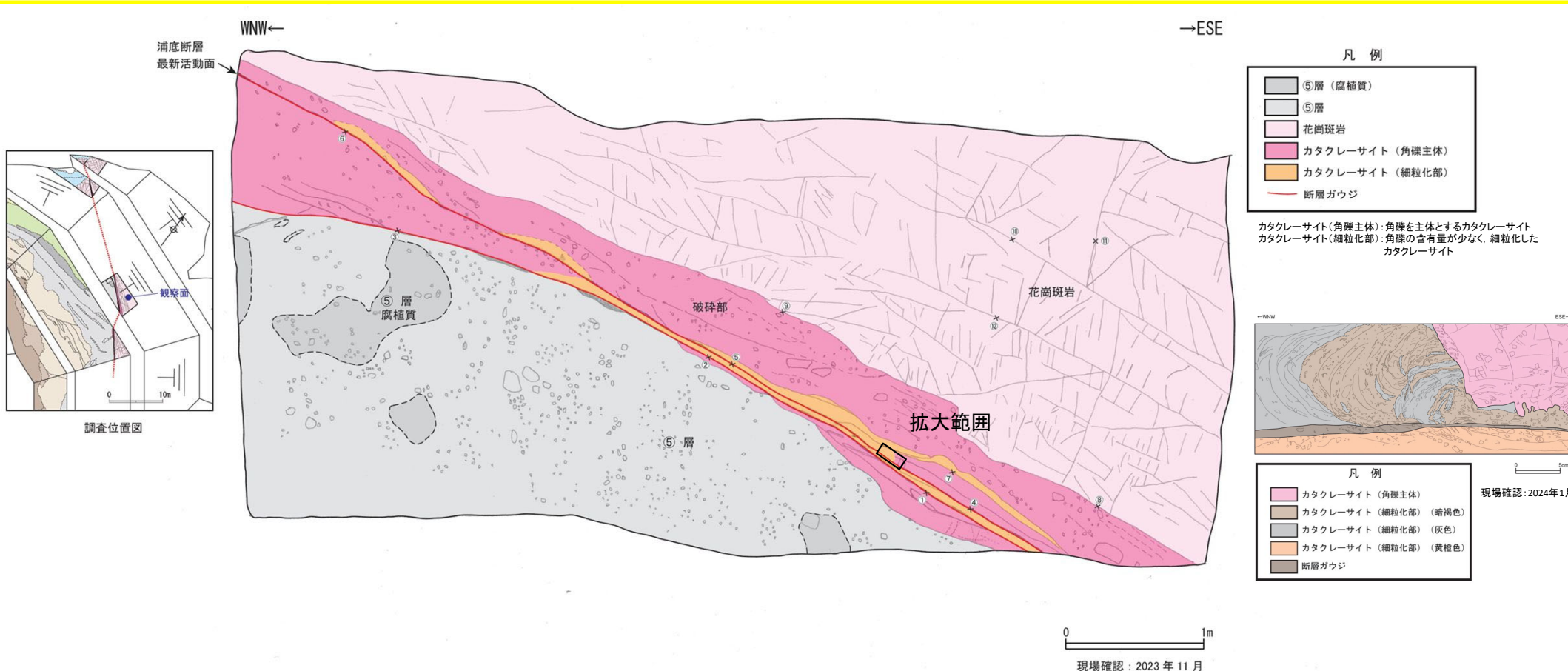
【コメントNo.現地調査-26】

D-1トレンチ北法面上(浦底断層の観察面)において、浦底断層の破碎部のガウジが変形している状況をスケッチに反映すること。また、スケッチの凡例に『カタクレーサイト(粘土状部)』と記載があるため、適正化すること。



【回答要旨】

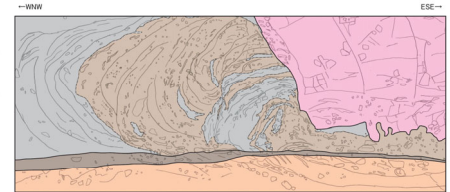
- 当該箇所の拡大スケッチを追加した。なお、当該箇所は軟質で、母岩の原岩組織は認められないが、細粒部の連続性・直線性に乏しいことから断層ガウジではなく細粒化したカタクレーサイトであると判断した。
- カタクレーサイト(粘土状)の記載を適正化した。元々は礫の含有量や基質の粒度によって、カタクレーサイト(礫状)、カタクレーサイト(砂～シルト状)、カタクレーサイト(粘土状)に区分していた。しかし、「粘土状」の記載が断層ガウジの粘土と誤解を与えることから、元々カタクレーサイト(礫状)としていた角礫を主体とする部分をカタクレーサイト(角礫主体)とし、カタクレーサイト(砂～シルト状)及びカタクレーサイト(粘土状)としていた、細粒化し礫の含有量が少ない部分をカタクレーサイト(細粒化部)と区分し、その性状を凡例の下に記載した。



凡例

⑤層 (腐植質)
⑤層
花崗斑岩
カタクレーサイト (角礫主体)
カタクレーサイト (細粒化部)
断層ガウジ

カタクレーサイト(角礫主体):角礫を主体とするカタクレーサイト
カタクレーサイト(細粒化部):角礫の含有量が少なく、細粒化したカタクレーサイト



凡例

カタクレーサイト (角礫主体)
カタクレーサイト (細粒化部) (暗褐色)
カタクレーサイト (細粒化部) (灰色)
カタクレーサイト (細粒化部) (黄褐色)
断層ガウジ

- ・浦底断層は東側の花崗斑岩と西側の堆積物とを境している。
- ・浦底断層には2条の断層ガウジが認められ、東側の断層ガウジがより直線的に分布する(最新活動面)。
- ・浦底断層の破碎幅は40～120cm程度である。

⑤層 シルト質砂礫
灰白色(5Y8/2)。酸化部は黄褐色(10YR7/8)。
径10cm以下の花崗斑岩の亜角～亜円礫を30%程度含む。風化礫が主体。
基質は細～中砂主体で、粗砂、シルト、径5mm以下の石英粒を含む、
締まりは良い。
浦底断層による引きずりで、礫はほぼ鉛直方向に配列している。

⑤層(腐植質部) 腐植質シルト質砂礫
灰色(5Y6/1)
周囲に比べて腐植質となっている。構成する礫などは上記の⑤層と同じである。
ブロック状に分布する。

花崗斑岩
灰黄褐色(10YR4/2)
割れ目間隔は10数cm程度である。
割れ目が開口し、流入物を挟むことが多く、ブロック状・角礫状に分離しやすい。
岩片は中硬質であるが、一部は軟質化し割れ目が不明瞭な部分もある。

破碎部
灰黄褐色(10YR4/2)～灰白色(10YR8/2)
幅40～120cm程度。
角礫主体のカタクレーサイトが主体で、レンズ状～層状に細粒化したカタクレーサイトを伴う。角礫主体のカタクレーサイト中には網目状の灰黄色粘土が見られる。また、東側の断層ガウジに沿って渦巻き状に変形した細粒化したカタクレーサイトが局所的に見られる。
2条の断層ガウジが認められ、西側の断層ガウジは上部で下盤側に倒れこんでいる。断層ガウジ中には岩片の引きずりやR1面、P面が認められ、いずれも逆断層・左ズレセンスを示す。

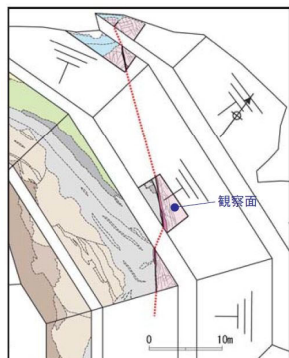
- | | |
|------------------|-------------------------|
| ① f: N29° W70° E | 断層ガウジ(暗褐色粘土:幅0.5～3cm) |
| ② f: N28° W57° E | 断層ガウジ(暗褐色粘土:幅0.5～2cm) |
| ③ f: N51° W40° E | 断層ガウジ(暗褐色粘土:幅0.4～1.8cm) |
| ④ f: N27° W65° E | 断層ガウジ(暗褐色粘土:幅0.8～2cm) |
| ⑤ f: N25° W56° E | 断層ガウジ(暗褐色粘土:幅0.5～2cm) |
| ⑥ f: N39° W64° E | 断層ガウジ(暗褐色粘土:幅0.5～1.8cm) |
| ⑦ f: N25° W63° E | 淡黄色粘土(幅0.1cm)を挟む |
| ⑧ f: N27° W26° E | 暗褐色粘土(幅0.1～0.3cm)を挟む |
| ⑨ f: N43° W58° E | 淡黄色砂質シルト(幅0.2cm)を挟む |
| ⑩ j: N3° E30° E | 暗褐色粘土(幅0.2～1cm)挟む |
| ⑪ j: N65° E78° S | |
| ⑫ j: N33° E26° E | 暗褐色粘土(幅0.1～0.5cm)挟む |

※走向は偏角補正済み

その他観察面(D-1トレンチ北法面上 写真)

WNW←

→ESE



調査位置図



拡大写真範囲

変形していない
カタクレーサイト(細粒化部)

変形したカタクレーサイト(細粒化部)

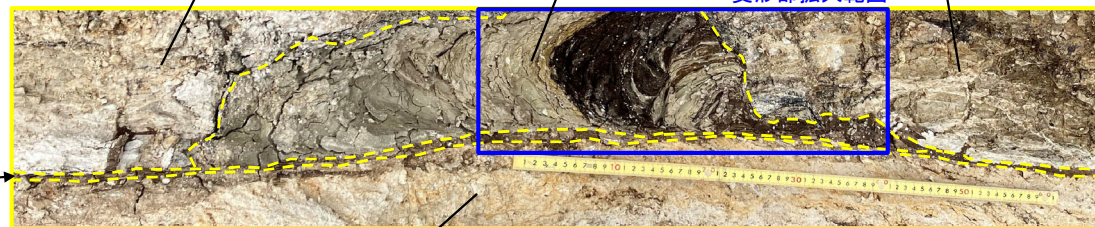
カタクレーサイト(角礫主体)

WNW←

→ESE

変形部拡大範囲

断層ガウジ



カタクレーサイト(細粒化部)

写真撮影:2024年1月

0 20cm

拡大写真

変形したカタクレーサイト(細粒化部)は、西側では変形していないカタクレーサイト(細粒化部)と、東側ではカタクレーサイト(角礫主体)とそれぞれ接しており、連続性に乏しい。また、変形したカタクレーサイト(細粒化部)は、渦巻き状に変形しており、直線性に乏しい。

0 1m
写真撮影:2023年11月



写真撮影:2024年1月

0 5cm

変形部拡大写真

その他観察面(D-1トレンチ北法面上 スケッチ) 修正前後比較

その他観察面(D-1トレンチ北法面上 スケッチ)を修正

従前

修正後

第1225回審査会合

資料3-1

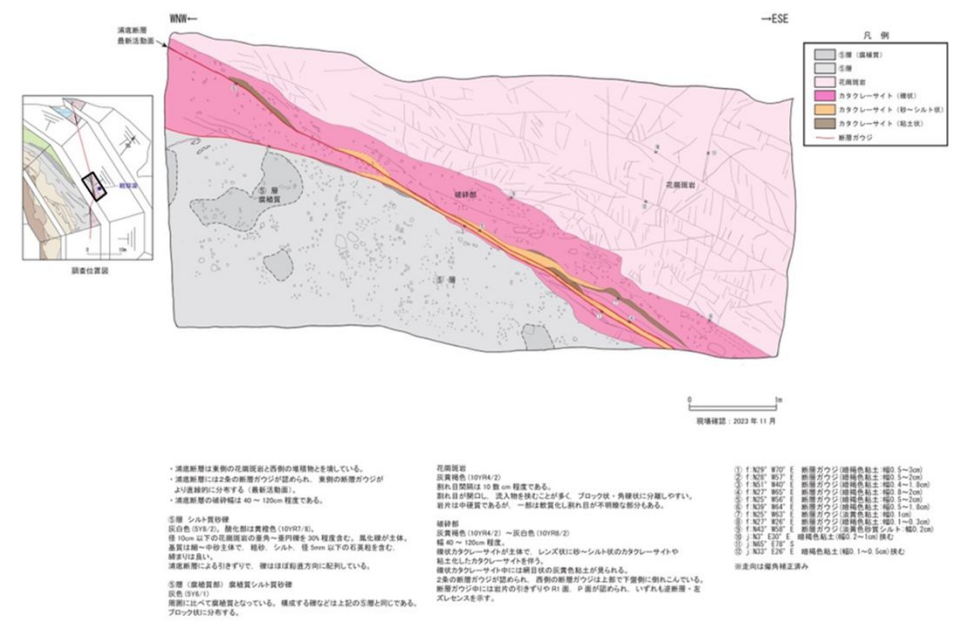
敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性

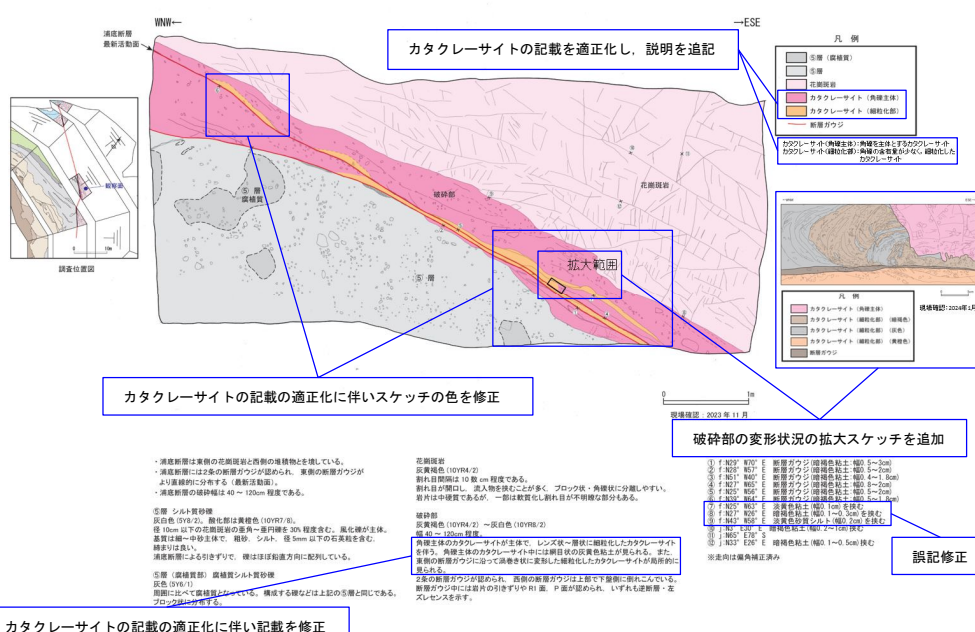
(令和5年12月14, 15日現地調査 資料1)

2-95頁

2.2.9 その他観察面(D-1トレンチ北法面上 スケッチ)



その他観察面(D-1トレンチ北法面上 スケッチ)



コメント回答(現地調査-27)

余白

【コメントNo.現地調査-27】

(H24-H-13孔)

現地調査資料 資料4(ボーリングコア資料33頁)において16.60mとしているD-1破砕帯の上端深度を再検討すること。



【回答要旨】

- H24-H-13孔で確認されたD-1破砕帯の上端深度について、ボーリングコア及びCT画像を確認した。
- ボーリングコアを確認した結果、16.60m～16.73mは基質部が破砕岩片主体の粘土混じり礫状破砕部からなり、16.60mより浅部は強く熱水変質しているが、破砕しておらず原岩組織が認められる花崗斑岩からなることが観察された。
- CT画像を確認した結果は以下の通りである。
 - 深度16.60m 付近以深は全体に密度の低い基質部からなる。
 - 16.60m付近以浅は密度がやや高い小岩片が多く、規則的な節理が認められる。
- ボーリングコア及びCT画像の確認結果から、D-1破砕帯の上端深度は16.60mであると判断した。

H24-H-13孔 D-1破碎帯の上端深度について

- ボーリングコアを確認した結果、16.60m～16.73mは基質部が破碎岩片主体の粘土混じり礫状破碎部からなり、16.60mより浅部は強く熱水変質しているが、破碎しておらず原岩組織が認められる花崗斑岩からなることが観察された。

ボーリング柱状図

15.34～16.60m: 部分的に土砂状を呈する。
 ●16.60～16.86m: 破碎部 (D-1破碎帯)
 16.60～16.73m: 粘土混じり礫状破碎部 (Hj)
 上端36°で波打つ, 下端60°で直線的。

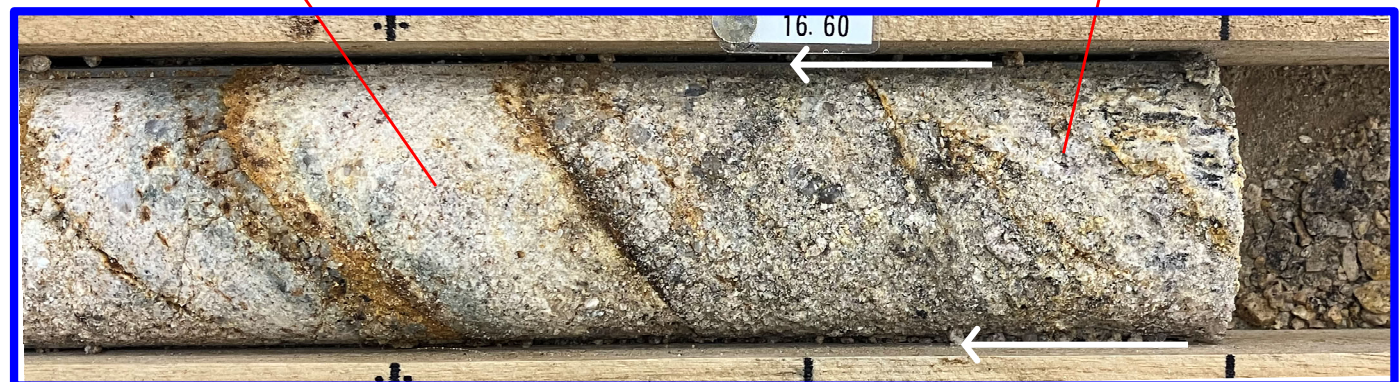
コア写真(2023年12月現地調査時)



凡例
 ← 当初の破碎部範囲*
 ※: 写真上は白色で記載

強く熱水変質しているが、破碎しておらず、
 原岩組織が認められる花崗斑岩

基質部が破碎岩片主体の粘土混じり礫状破碎部



青枠部拡大

0 5 cm

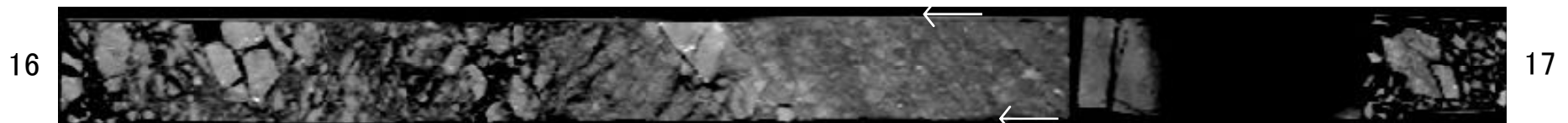
H24-H-13孔 D-1 破碎帯の上端深度について CT画像による評価(1/2)

- CT画像を確認した結果は以下の通りである。
 - 深度16.60m 付近以深は全体に密度の低い基質部からなる。
 - 16.60m付近以浅は密度がやや高い小岩片が多く、規則的な節理が認められる。

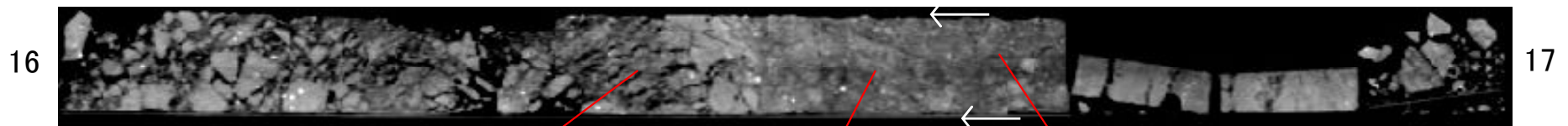
コア写真(2023年12月現地調査時)



CT画像(水平断面)



CT画像(鉛直断面)



密度が高く、規則的な節理が認められる

密度がやや高い小岩片が多い

密度の低い基質部からなる

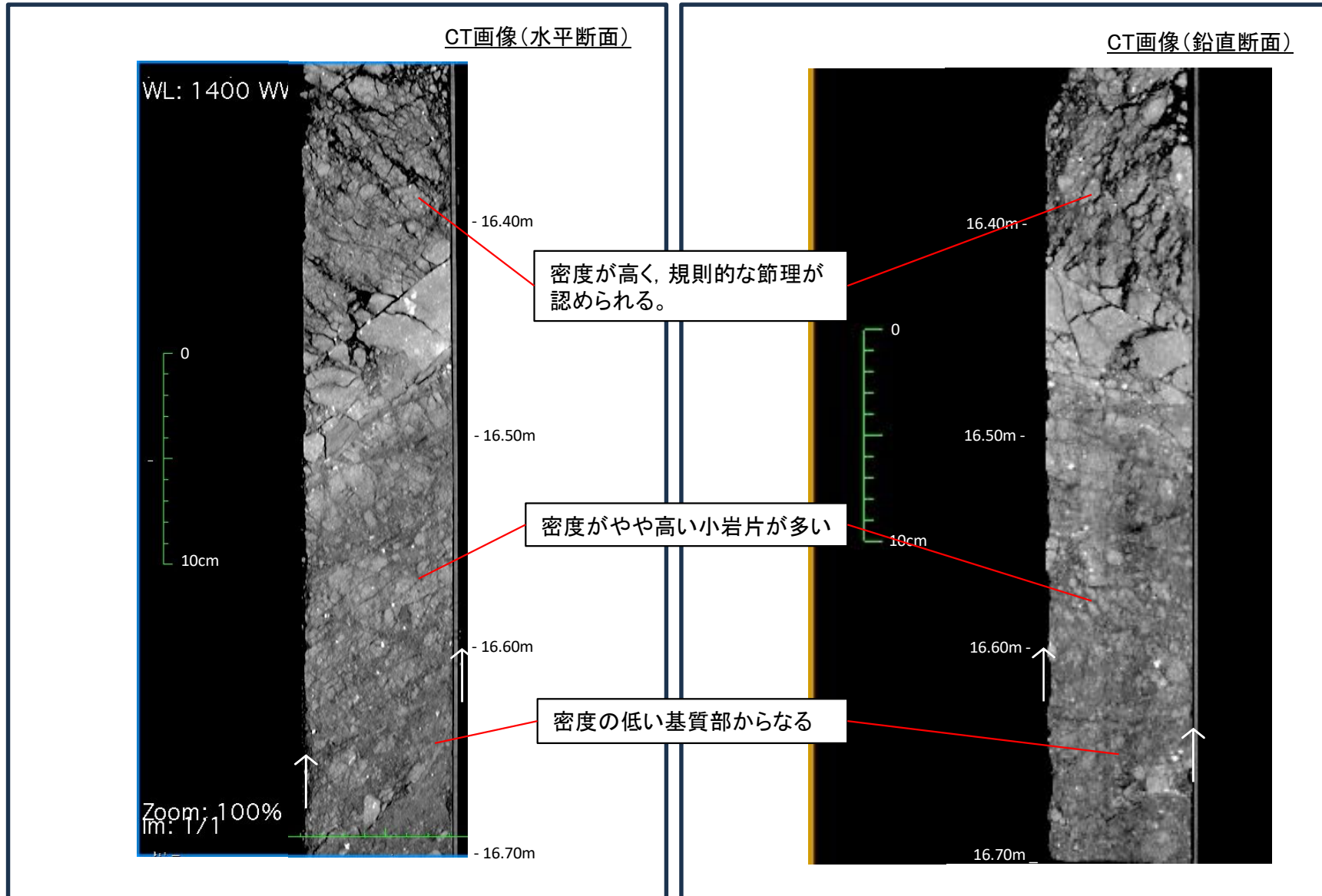
凡例

→ 破碎部範囲※

※: 写真上は白色で記載

H24-H-13孔 D-1破碎帯の上端深度について CT画像による評価(2/2)

- CT画像を確認した結果は以下の通りである。
 - 深度16.60m 付近以深は全体に密度の低い基質部からなる。
 - 16.60m付近以浅は密度がやや高い小岩片が多く、規則的な節理が認められる。
- 以上の確認結果から、D-1破碎帯の上端深度は16.60mであると判断した。



5. 参考文献

余白

参考文献

- 狩野謙一, 村田明広(1998): 構造地質学, 朝倉書店
- 高木秀雄・小林健太(1996): 断層ガウジとマイロナイトの複合面構造—その比較組織学, 地質学雑誌, Vol. 102, No. 3, p. 170—p. 179
- 林愛明(2000): 活断層のトレンチ・野外調査における断層破砕帯の組織構造の解析と適用について, 応用地質, Vol. 41, No. 3, p. 135—p. 140
- 中島隆・高木秀雄・石井和彦・竹下徹(2004): フィールドジオロジー7 変成・変形作用, 共立出版
- 木村敏雄(1981): 断層, とくに断層破砕帯の見方, 考え方, 応用地質, Vol. 22, No. 1
- 相山光太郎・田中姿郎・佐々木俊法(2017): 断層破砕帯の詳細構造解析に基づく断層の活動性の検討: 山田断層の例, 応用地質, Vol. 58, No. 1, p. 2—p. 18
- C. W. Passchier and R. A. J. Trouw(2005): Microtectonics Second Edition, p. 26—p. 37
- G. Manatschal(1999): Fluid and reaction-assisted low-angle normal faulting: evidence from rift-related brittle fault rocks in the Alps (Err Nappe, eastern Switzerland), Journal of Structural Geology 21, p. 777—p. 793
- 相山光太郎・金折裕司(2019): 山口—出雲地震帯西部に沿って新たに発見された活断層系, 地質学雑誌, Vol. 125, No. 7, p. 555—p. 570
- 上田圭一・谷和夫(1999): 基盤の断層変位に伴う第四紀層及び地表の変形状況の検討(その2)—正断層, 逆断層模型実験—, 電力中央研究所
- 井上厚行(2003): 熱水変質作用, 資源環境地質学—地球史と環境汚染を読む—, p. 195—p. 202

余白

6. コメント一覧

余白

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性に係る審査会合及び現地調査コメント

No.	日付	回次	区分	コメント内容	回答時期(資料提出時期)
現地調査-16	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	K断層の分布 及び性状	K断層について、どのようなものをK断層と定義しているのか、考え方や見た目の特徴など、着目している観点や検討順序等が分かるようにすること。	3月上旬
1225-3	令和6年 2月9日	第1225回	K断層の分布 及び性状	K断層の定義については(コメントNo.現地調査-16)、考え方や見た目の特徴、堆積層中のK断層の分布、K断層の活動回数、破碎幅等も踏まえ、着目している観点や検討順序等が分かるように説明すること。	
現地調査-21	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	K断層の分布 及び性状(コア観察)	D-1破碎帯に比べ、K断層の破碎幅は広く、資料から読み取ると、平均で約1mとなっている。このような規模の断層がふげん道路ピットの南端で消滅すると判断することができるのか、説明すること。	3月上旬
1187-3	令和5年 9月22日	第1187回	K断層の分布 及び性状	K断層は、D-1トレンチ内において、屈曲して走向を変え、数条に分岐し、平面的に連続していないことから、K断層がD-1トレンチ北西法面からふげん道路ピットの中央付近まで連続していると事業者が判断した考え方と根拠を整理して説明すること。	3月上旬
1202-22	令和5年 11月10日	第1202回	K断層の分布 及び性状	K断層の分布・性状に関して、前回審査会合において指摘した点(コメントNo.1187-3)の再確認として、K断層の活動性評価に係る調査地点の妥当性確認の観点から、その分布・性状について深部方向の情報(断面図等)を含めて説明すること。	
現地調査-17	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	K断層の分布 及び性状	現地調査資料の断面図には、K断層の破碎幅が記載されている。平面図において、ピットの各地点におけるK断層の幅も考慮して見える化すること。	
現地調査-18	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	K断層の分布 及び性状	K断層の分布に関わるボーリングコアに関して、柱状図、コア写真、断面図、研磨面の資料の未提出分について提出すること。	

凡例



:説明済のコメント

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性に係る審査会合及び現地調査コメント

No.	日付	回次	区分	コメント内容	回答時期(資料提出時期)
1202-19	令和5年 11月10日	第1202回	K断層の分布 及び性状	ふげん道路ピットで認められる変位が、基盤岩中のK断層から連続しているか不明な状況で、K断層によるものと判断した根拠を説明すること。	3月上旬
1202-32	令和5年 11月10日	第1202回	K断層の分布 及び性状	ふげん道路ピットで確認された断層をK断層と評価した根拠について説明すること。	
1210-6	令和5年 12月8日	第1210回	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	ふげん道路ピットでのK断層の活動性評価に関し(コメントNo.1202-32)、ふげん道路ピットで確認された断層をK断層と評価した根拠について、以下のことから現時点では判断できない。 <ul style="list-style-type: none"> 調査データからは走向・傾斜は必ずしも調和的であるとは言えない箇所があること。 コメントNo.1202-22 が未回答であること。 	
現地調査-19	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	K断層の分布 及び性状	性状一覧表の破碎幅について、実幅であることが分かるよう注記をすること。	3月上旬
現地調査-20	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	K断層の分布 及び性状	2-1ピットで観察している条線について、観察箇所の写真を追加すること。	3月上旬
現地調査-22	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	K断層の分布 及び性状(コア観察)	(H24-H-5孔) 現地調査資料 資料4(ボーリングコア資料29頁)において4.28mとしている岩着深度を再検討すること。	3月上旬
現地調査-23	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	K断層の分布 及び性状(コア観察)	(H24-H-14孔) 現地調査資料 資料4(ボーリングコア資料36頁)において7.81mとしているK断層の下端深度を再検討すること。	

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性に係る審査会合及び現地調査コメント

No.	日付	回次	区分	コメント内容	回答時期(資料提出時期)
1202-1	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	⑤層上部と同層下部を区分している根拠を説明すること。	5月中旬
現地調査-5	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	⑤層の堆積構造及び上部下部の境界について、根拠として いる観察事実を資料に記載すること。	
1202-2	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	⑤層下部で確認された美浜テフラの分析結果について、濃集 分析結果の詳細を説明すること。	5月中旬
1202-3	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	⑤層下部が再堆積ではないことを説明すること。	5月中旬
1225-1	令和6年 2月9日	第1225回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	⑤層下部の再堆積については(コメントNo.1202-3)、海上 ボーリングで確認されるテフラの産出状況とD-1トレンチで 確認されるテフラの産出状況に差異があることも踏まえ、⑤ 層下部が再堆積ではないことを説明すること。	
1202-27	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	北西法面で実施したテフラ分析において、K-Tz層準で見られ る普通角閃石について説明すること。	5月中旬
1202-7	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	OSL信号の飽和を踏まえた測定結果の信頼性、年代測定 の根拠の妥当性を説明すること。	5月中旬
1210-1	令和5年 12月8日	第1210回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	OSL年代測定結果の信頼性やOSL年代測定の根拠の妥当 性に関し(コメントNo.1202-7)、説明内容が丁寧かつ十分で はないことから、適切な資料を示すこと。 また、OSL年代測定結果の信頼性に関し、誤差の算定の方 法、プロセスなども示すこと。	

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性に係る審査会合及び現地調査コメント

No.	日付	回次	区分	コメント内容	回答時期(資料提出時期)
1202-8	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	OSL年代測定結果の飽和年代の取扱いについて、説明すること。	5月中旬
1210-2	令和5年 12月8日	第1210回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	論文では飽和値を超えた場合の年代の記載は、誤差を示していない旨の説明であったが(コメントNo.1202-8)、一般的に論文中で扱う数値は、論文の目的により数値の示し方も変わるものであり、当該論文中には、評価結果としての誤差の数値が示されておらず、誤差の扱いが明確でないことから明確にすること。 一般的に測定手法の特徴として評価結果に誤差が生じるものは、その評価結果は誤差を念頭に扱うものであることから、誤差を考慮する必要がないとするのであれば、その技術的妥当性について根拠を示しつつ丁寧に説明すること。	
1210-3	令和5年 12月8日	第1210回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	資料2-2のp.2-41のOSL年代測定値で、③層の試料の等価線量は、1000Gyを超えている。Murray et al.(2014)の論文では、1000Gyを超えるような試料は分析結果として使えない旨の記載がある。このことを踏まえても、③層の試料が分析に使えると考える根拠を説明すること。	5月中旬
1202-25	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	北西法面において③層を細区分しているが、それらの地層を同じ③層と評価している根拠を示すこと。	5月中旬
1202-30	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	北西法面の③層を細区分しているが、写真では境界が明瞭ではない。細区分が出来るか否かを説明すること。	
現地調査-11	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	原電道路ピットの地層区分について、層序による区分にて地層境界を示すこと。	

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性に係る審査会合及び現地調査コメント

No.	日付	回次	区分	コメント内容	回答時期(資料提出時期)
1202-6	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	③層の堆積環境について、巨礫を含む砂礫主体の層相であることを踏まえると、側方の山からの影響を受けた崖錐ないし扇状地性のものである可能性を否定できないことから、西側の谷地形及びチャンネル構造に関する内容も含めて説明すること。	5月中旬
現地調査-3	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	D-1トレンチ全体(西法面を含む)の③層の堆積構造、③層の分布を検討すること。	
1225-2	令和6年 2月9日	第1225回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	D-1トレンチ全体(西法面を含む)の③層の堆積構造及び年代的なつながりについては(コメントNo.現地調査-3)、③層の細区分された層の紐づけの根拠、走向・傾斜等のデータを踏まえ、検討すること。	
1202-9	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	北西法面の測線Bの鬼界葛原テフラ(K-Tz)の粒子が下位の③層上部に検出されているように見える点について、説明すること。	5月中旬
1202-23	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	当初申請書に記載していた③層で実施したテフラ分析結果を補正申請で削除した理由について説明すること。	5月中旬
1210-4	令和5年 12月8日	第1210回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	<p>当初申請書には記載されていたが補正申請において削除された③層のテフラ分析結果に関し(コメントNo.1202-23)、以下のことから、当該分析結果については、③層の堆積時期をMIS6と評価する根拠になりうるか、追加の説明を現時点では判断できない。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 対比した海上ボーリングNo.2では降灰層準を示唆するような角閃石の明瞭なピークは認められず、その主成分分析結果も大きくばらついていることから、当該ボーリングのMIS6の層準には、単に複数のテフラ起源の鉱物が散在しているだけでも解釈でき、年代対比の基準となる明確な降灰層準があるか不明であること。 • 対比された③層の試料について、③層中の複数箇所から採取した試料の混合であり、どの層準の年代かが不明であるため、同じような角閃石が様々な層準から産出することは③層が再堆積であることを示唆するものとも考えることもできること。 	

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性に係る審査会合及び現地調査コメント

No.	日付	回次	区分	コメント内容	回答時期(資料提出時期)
現地調査-6	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	海上ボーリングNo.2孔 MIS6層準から検出されている③層テ フラに関する資料を示すこと。	5月中旬
1202-4	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	③層上部の土壌化について、現地で確認する。	第1回現地調査にてご説明
1202-5	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	土壌化までの時間について、具体的に説明すること。	5月中旬
現地調査-4	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	D-1トレンチ北法面の土壌化部の判断基準について、生痕 化石、炭化物等、周囲との差異が分かる特徴がないか検討 すること。	
1202-10	令和5年 11月10日	第1202回	⑤層と③層の 堆積年代の 評価	⑤層及び③層の堆積年代について、どのような調査結果に 基づき、どのような考え方で時代観を特定しているのか資料 に記載すること。	5月中旬
1202-13	令和5年 11月10日	第1202回	D-1トレンチ 北西法面での K断層の活動 性評価	K断層に関して、変位は上方に向かって断続的になるにもか かわらず、変形は上部でも明確に認められるとしていること について説明すること。	5月中旬
1202-29	令和5年 11月10日	第1202回	D-1トレンチ 北西法面での K断層の活動 性評価	北西法面においてK断層による変形量を求めることは困難で あり、変位が上方に向かって減少している状況において変形 だけが出ているとしていることについて説明すること。	
1202-20	令和5年 11月10日	第1202回	原電道路ピット及びふげん 道路ピットで のK断層の活 動性評価	ふげん道路ピットと北西法面での評価(変位・変形)との整合 性について説明すること。	

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性に係る審査会合及び現地調査コメント

No.	日付	回次	区分	コメント内容	回答時期(資料提出時期)
1202-24	令和5年 11月10日	第1202回	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	原電道路ピットにおいて、K断層に見られる2つの変位量を合わせて、K断層のトータルの変位量とした考えを明確にすること。 一般的な変位量の出し方を説明し、個々の地点ごとにその説明をすること。	5月中旬
1210-5	令和5年 12月8日	第1210回	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	原電道路ピットでのK断層の変位量の評価について(コメントNo.1202-24)、断層が上方で複数本に分岐する場合の断層全体の変位量の一般的な算定方法を踏まえて具体的に説明すること。	
1202-11	令和5年 11月10日	第1202回	D-1トレンチ北西法面でのK断層の活動性評価	北西法面におけるK断層の変位が層中でせん滅していることについて、現地調査で確認する。	第1回現地調査にてご説明
現地調査-7	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	D-1トレンチ北西法面でのK断層の活動性評価	D-1トレンチ北西法面の③層のm層下段の割れ目のようなものについて再確認すること。	3月上旬 (詳細観察に基づくスケッチは、コメントNo.現地調査-10と合わせ5月中旬に提出)
現地調査-9	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	D-1トレンチ北西法面でのK断層の活動性評価	D-1トレンチ北西法面の⑦層中の複数の割れ目について、追加の観察を行うこと。	3月上旬 (詳細観察に基づくスケッチは、コメントNo.現地調査-10と合わせ5月中旬に提出)
現地調査-8	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	D-1トレンチ北西法面でのK断層の活動性評価	D-1トレンチ北西法面の③層のK断層による非変形と判断している範囲について、D-1トレンチ東側等③層中の非変形と判断している範囲で未計測箇所の走向・傾斜のデータを拡充すること。	5月中旬
現地調査-10	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	D-1トレンチ北西法面でのK断層の活動性評価	第1回現地調査コメント(No.7~No.9)を踏まえ、D-1トレンチ北西法面のスケッチを最新化すること。	5月中旬

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性に係る審査会合及び現地調査コメント

No.	日付	回次	区分	コメント内容	回答時期(資料提出時期)
1202-12	令和5年 11月10日	第1202回	D-1トレンチ 北西法面での K断層の活動 性評価	K断層西側の地層の傾斜を変形によるものと評価しているが、③層の堆積構造は成層構造ではなく、元の堆積構造が分からない状況で、傾斜が変形によるものと判断することは困難であることから、j層以下が変形していると評価した根拠を説明した上で、上載地層のk層が変形を受けていないとする根拠を説明すること。	5月中旬
1202-14	令和5年 11月10日	第1202回	D-1トレンチ 北西法面での K断層の活動 性評価	上記の上で、仮にj層以下が変形を受けたものとしても、上載地層のk層がj層の一部(東側)の上位にしか観察されないことを踏まえると、k層を上載地層としてK断層の活動性を評価する手法の妥当性が乏しいことから、K断層の活動性評価の妥当性について説明すること。	
1202-26	令和5年 11月10日	第1202回	D-1トレンチ 北西法面での K断層の活動 性評価	北西法面の③層については成層構造ではなく、断層による変形の影響を判断した根拠を説明すること。同法面の③層において、K断層による影響がk層まで及んでいないと評価するためには、合理的な説明をすること。	
1202-28	令和5年 11月10日	第1202回	D-1トレンチ 北西法面での K断層の活動 性評価	北西法面においてK断層による影響をシュミットネット等で検討しているが、e層を分けて整理したことについて説明すること。	5月中旬
1202-16	令和5年 11月10日	第1202回	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	原電道路ピットのD3層とC層の傾斜不整合関係について説明すること。	5月中旬
1202-18	令和5年 11月10日	第1202回	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	ふげん道路ピットで、C層とD3層が、同じ③層中で大きな年代差がなく、層相も類似するのに傾斜不整合関係と判断した根拠を説明すること。	
1202-31	令和5年 11月10日	第1202回	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	原電道路ピットにおいて、同じ③層内で不整合境界があるとする根拠及び不整合境界の位置を明確にすること。	

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性に係る審査会合及び現地調査コメント

No.	日付	回次	区分	コメント内容	回答時期(資料提出時期)
現地調査-12	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	原電道路ピットにおいて、現地調査のための最新スケッチ作成において確認したK断層の延長上にある割れ目のようなものをK断層としていない根拠を示すこと。	5月中旬
1202-17	令和5年 11月10日	第1202回	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	原電道路ピットにおけるK断層による変位は、スケッチではC層中でせん滅していることについて、現地調査で確認する。	第1回現地調査にてご説明
現地調査-13	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	ふげん道路ピットにおいて、K断層が③層のD3層で切られているかC3層の途中でせん滅しているかが分かりにくいいため、追加の観察を行うこと。また、礫層中でせん断面をトレースしている理由を示す資料を追加すること。	5月中旬
現地調査-14	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	ふげん道路ピット東法面(上段)において、K断層の北から3つ目のせん断面(C1層中)の分布について確認すること。	
1202-15	令和5年 11月10日	第1202回	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	D3層にK断層による変形がないとしているが、北西法面でK断層の上部は変形が主体との説明と整合性がなく、原電道路ピットにおけるK断層の活動性評価は変位しか示されていないことから、変形についてどのように評価したのか説明すること。	5月中旬
1202-21	令和5年 11月10日	第1202回	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	ふげん道路ピットのD3層に変形がないと評価した根拠を説明すること。	

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性に係る審査会合及び現地調査コメント

No.	日付	回次	区分	コメント内容	回答時期(資料提出時期)
現地調査-15	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	第1回現地調査コメント(No.11～No.14)を踏まえ、原電道路ピット及びふげん道路ピットのスケッチを最新化すること。	5月中旬
1210-7	令和5年 12月8日	第1210回	原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価	ふげん道路ピット東法面(上段)の⑦のせん断面については、堆積層中で傾斜が逆転しているため、正断層センスになると考えられる。今後議論するK断層の連続性の評価の際には、同じ断層でも、確認箇所によっては局所的に走向・傾斜、変位センスが異なる場合もあることも踏まえて説明すること。	5月中旬
現地調査-24	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	K断層の連続性評価	K断層の連続性評価の資料についても、これまでの審査コメントを踏まえ充実化を行うこと。	3月上旬
現地調査-25	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	K断層の連続性評価(コア観察)	(H24-D1-1孔) 柱状図の記事欄にK断層と記載の箇所(58.96～59.30m)について、K断層と評価しない理由を説明すること。	3月上旬
現地調査-28	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	その他(コア観察)	(H24-D1-1孔) G断層の箇所(60.12m)の研磨片において、白い脈が見えるためXRD等の鉱物脈に関するデータを拡充すること。	3月上旬
1187-4	令和5年 9月22日	第1187回	その他	K断層の活動性・連続性の評価方針と検討の流れについて、事業者の作業手順となっていることから、新規基準に適合すると判断した論理構成とその根拠を明確にした資料で説明すること。(資料1-3)	第1202回審査会合にてご説明
現地調査-26	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	その他	D-1トレンチ北法面上(浦底断層の観察面)において、浦底断層の破砕部のガウジが変形している状況をスケッチに反映すること。また、スケッチの凡例に『カタクレーサイト(粘土状部)』と記載があるため、適正化すること。	3月上旬
現地調査-27	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	その他(コア観察)	(H24-H-13孔) 現地調査資料 資料4(ボーリングコア資料33頁)において16.60mとしているD-1破砕帯の上端深度を再検討すること。	3月上旬

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性に係る審査会合及び現地調査コメント

No.	日付	回次	区分	コメント内容	回答時期(資料提出時期)
1187-1	令和5年 9月22日	第1187回	スケジュール 及び手順	K断層の活動性・連続性に関し、次回以降の審査会合で、まずはK断層の活動性について議論し、その後、原子炉建屋直下を通過する破碎帯とK断層の連続性を議論すること。	審査会合にて適宜ご説明
1187-2	令和5年 9月22日	第1187回	スケジュール 及び手順	K断層の活動性評価の確認に当たって、トレンチやボーリング等の地質調査データは、新規規制基準への適合性を説明する重要な科学的データであることから、早い段階に現地を確認すること。	第1回現地調査にてご説明
1210-8	令和5年 12月8日	第1210回	スケジュール 及び手順	指摘事項のうち、「次回審査会合で説明予定(現地調査で説明予定)」としている項目があるが、これらの指摘事項については、現地調査で現在の露頭の状況を確認しつつ、事業者からの説明は受けるが、その際、現在の状況だけでなく、補正申請の記載内容について、その差違の有無も含めて説明するとともに、その具体的な議論は、次回以降の審査会合で行うので、改めて説明すること。	3月上旬又は5月中旬
1210-9	令和5年 12月8日	第1210回	スケジュール 及び手順	現地調査後の審査の進め方に関して、次回審査会合では、今回の審査会合で未回答の指摘事項への回答及び現地調査でのコメントへの回答についての確認、議論を予定している。前回審査会合で議論した「D-1トレンチにおける⑤層と③層の堆積年代の評価」、「北西法面でのK断層の活動性評価」及び「原電道路ピット及びふげん道路ピットでのK断層の活動性評価」の3つの項目について、事業者の評価結果とそれに直接関係するコメント回答を提出すること。	3月上旬又は5月中旬

敷地内のD-1トレンチ内に認められるK断層の活動性に係る審査会合及び現地調査コメント

No.	日付	回次	区分	コメント内容	回答時期(資料提出時期)
現地調査-1	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	スケジュール 及び手順	今後の対応について、分析や調査の実施順序、コメントに対する説明順序を次回会合(2月中目途)で説明すること。	1月下旬
現地調査-2	令和5年 12月14,15日	第1回 現地調査	スケジュール 及び手順	ブロックサンプル採取の際は、事前に現状を鮮明な写真と詳細スケッチにて保存し、説明すること。	面談にて適宜ご説明 ・北西法面:3月上旬 ・原電道路ピット:4月上旬 ・ふげん道路ピット:4月上旬
1225-4	令和6年 2月9日	第1225回	スケジュール 及び手順	コメント回答については、5月中旬までに全て回答されることを確認したが、回答時期が5月中旬となっているもののうち、優先順位を付けて回答できるものは3月中に回答すること。	以下のコメントは、3月上旬に回答する。 現地調査-7 現地調査-21 現地調査-24 現地調査-25 現地調査-28
1225-5	令和6年 2月9日	第1225回	スケジュール 及び手順	今後の審査会合の進め方に関し、次回審査会合は、K断層の活動性に係る未回答の指摘事項への回答及びK断層の連続性についての確認、議論をする。	3月上旬
1225-6	令和6年 2月9日	第1225回	スケジュール 及び手順	今後の審査会合の進め方に関し、次回審査会合後は、K断層の連続性に係る地質データの事前の確認を目的とした現地確認を実施する。	4月中旬